内裏歌合　　康正元年十二月二十七日

題　　水鳥

庭殘菊　　松雪深

恋久戀　　祝言

作者

左

女房

特進二条友　関白

西三条公保　道兼内大臣

左衛門督雅親

左近衛中将雅康

貞常伏見友　式部卿親王

教房一条友　太大臣

大宰帥實雅

右中納言公綱

前大僧正滿意

太

准后（慈良一条院）　　内大臣（将軍宣旨実量）
右大将義政　　前大納言資任
権大納言親通　　権大納言勝光
治部卿宣　　右兵衛督為富
前大僧正義運　　権の僧都忠雅
讃師
講師
判者
左衛門督雅親朝臣

一番　左　庭殿菊　　女房

あしはらのくうちの菊やとしをへてきさらぎ殿の庭

右　　准后

冬さえてときはのうちの庭の菊もとしをへぬれはそなん

左　あしはらのくうちの菊の色はそまさりける

心ゆくしくはなえはりは太　　あ

かりやたれもたよはぬ庭のしのはた為信

二番　　関白

左

白雪のかさなれはかさなる松の葉をたのもしの

右 階　　右近大将義政

[illegible]の菊の籬に霜のしらぬ菊は一すじ
[illegible]の花のうつりかはるこゝろ
[illegible]
右籬の霜のしらぬ菊はとゝ[illegible]
[illegible]

三番

左 階　　式部卿宮親王

みし秋の花のうつりかはるこゝろ霜の色にまがへる庭の白菊

右　　前内大臣

萩の戸の花いとゝ[illegible]
[illegible]の庭

左菊のうつりかはるこゝろ霜の色にまがへる庭の白菊
右萩の戸の花の色のうつりかはるこゝろ
[illegible]

四番

左　　右大臣

雲の上の月の光に稀ふるまで霜にまがへる庭の白菊

右 階　　沙弥浄空

[illegible]の菊の庭のうつりかはるこゝろ白菊
左般若の雲の上のうつりかはるこゝろ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

の色に数そへてかさねぬる葉に菊をおもてさしゝへ
らまし事たりぬるにや哥の様優なりけりと見え侍るは
為持

五番

左 勝　　前大僧正滿意

庭の面に秋なき時をさくよりもうつろひぬるや秋の白菊

右　　前大僧正義蓮

おなしくは玉井の庭を花の色と盛に筆をおきまし

左秋なき時なとこれを古今集の哥より出るにこ
と葉もやうつろへる菊の霜よ色を心おもしろき右
右さけの(せれ)車御し祢と哥のたるくれへし持なるや

六番

左 勝　　入道前内大臣

美しさくへ吹南やうつりし神無月露の草の名さへうつろふ

右　　前大納言資任

木葉さへうつりそて半は霜の下に秋をおせる庭の白菊

左の哥面白のまにわるるに下句なりへし木の葉さ
へハ木の葉をさへの心なりや下句松へ下におもしいま
こうで所こそみえん花ハ木の葉ゟまさわゆへん

七番

左　　左兵衛督雅親

百世ふへさこ花の所や九重の霜よ分後をにおふ菊

右 持　　右兵衛督為冨

菊のうへ露を白むと霜枯て　秋のまき野の九月の庭

九庭の心をもしらなく次哥　このこゝろをしらくるの

さはるゝ作者はいかゝ　うまれまるるや　大霜の下

に秋をのこす心をおもしく　少え作の為持

八番

九 持　　大宰権帥実雅

霜をなれこの一ゝやさきの九月の庭　枯しらぬ庭は白菊

右　　権大納言勝光

白菊は美ふこゝろ持の為　おもはにのゝ世は物や庭はきこゝろ

九は一ゝやさきの九月の庭　いとしいたりて関ゆる井の白

いさゝ侵なゝ侵や　九又井三句ゝゝゝ為ゝ為ゝ

まさこちは地の字なくとこみゝ結ぶいなゝゝ

為ゝ為持

九番

九 持　　権大納言公猷

霜まよふ清菊の庭の色枯　はあさこ秋は菊の一りと

右　　権大納言親通

白菊はうつろふ庭をみさゝと　又咲むのお秋ゝゝ九の

九哥はゝゝに白のをきおとり　おるいい又七の白をき

かゝゝもちぬをきゝ侵をひきゝ　なゝ枯くゝゝ

ゝみなゝゝ結ふ　ゝうて以右の哥古今集よ色

ゝゝるあきの菊はゝ一ゝ　せよゝゝむゝゝ　花とゝゝ

[illegible]

ふみあらせらるる所いかに侍りと云ふ事を侍

たちなる所幸にて侍りと侍るに侍りて

十番　左

秋ちかくなりぬるかとぬるるもとくこそうるふ菊の花の露よ

右　勝　　法師僧教忠雅

うるふとてまちぬるかなしやわ菊の庭の白菊

左　所詮ようるふ菊の花の黄にてあきにわしも

秋人目かまはぬ色にうつむこそ侍りとなる

いかにうるふ侍る右哥うるふ菊とぬるる袖

かとよ侍り勝ちうえ

十一番　水鳥　　左衛門督雅親

左

月のこる池の玉藻の庭はよりはやすやすれ侍

右　勝　　前大僧正義運

河ちかはおれてら池の面かうき林の鶴はなくる声

左哥やつくしかく侍るとまくよけや

おろく人をさそわりもの志賀の浦波と池の哥

おもしろうや浦を池とは侍る哥はなる

かくこそ侍るとそ申哥は作ることいくかりを

やはり人多く侍るに侍りくいかあり明月をとあ

ゆこうわくまわりきれよいはまいきあたりの及ばし

十二番　た　右宰相中将実雅

風をさそふあれば袖にかをるきれ花の香ぞ

右　指　沙弥浄空

ゆくりなくあるきをとゝ思ひいるさとふるわらはこそのむ合よ

太奇させる事なく雑をゆくはるやゆ野小町の

まゝあれば身をうきまゝにまかせいへる奇をとゝまてり

ゆくりなくゆくはまとゝ後朱雀ゆかさとゝ風わらこ思

いくるをとゝよめるも撰集まへらまゆくるや奇

のさあたるよいまさりゆるや

十三番　た　右　入道前太后　准后

ゆくりなくもこしなくゝ花し我えんの池ゆくるを

たわ野のさりく入ゆくるをとけて秋の夜の月をけさ

まこの風情集の中ゆるをまゆとゝふ池しゆくい

ゆくゝ右のゆくる歌代よゆ事のゆくやんをまゆ

ゆくせらまゆゆゆゆくゆくれと奇えれ桜優

歌まわ次ゆとゝ（ゆ）ゆる持ゆやゆ（ゆゆ）

十四番

左 勝

式部卿親王

おもふこころ友禄の家はさゆる秋いたるまくさ花言はやはん

右 権大僧都忠雅

池水よつらゐあををれ葉まてうつるときゆるけてやはふ

たをそまくさをれ言はやはるしくおかしく結歌

右を歌ものきこゆまとかと奇はさ海松位よつさてい

左方勝

十八番

左 女房

秋ををこをこけををあやはふ作らはは家のをは結

右 拾 右近大将義政

歌ををあ野の羽ばいのあ人芦屋はは水をゆめ秋は

左秋ををこをこけををあやはふ作らはは家のをは結

のををあ方に續拾遺集より序歌の歌秋の社をおし

ぬるかはらはは家のをはは社をあ祢をはをやむし

ゆ撰集歌はをりてまはは世は月歌ををさ歌千年

歌治よ作りやは太立の第歌集乃古風わ出く姿

すかはよつをゆ方乃可勝

十六番

左 拾 前大僧正慈意

ゆをををあ家を宝あはるいをあはあは歌をやあく

右 右兵衛督為冨

うきてをしむ方と定めもとめ風吹て浪小さうふ池のあや
右方ときさうめしてを共之の風をけい方と定ときい
（あ）二句をとれるしやたゝ庭を定めと共ときこゝろかな
しいはまとかこうるめ方ををしめるかいまめんこほり
よきこゑいたゐ指

十七番　左　指　　非康朝臣

きりしえの春のたにのふるの雪ときき初やいな
右　　校大納言親通
いつまなれ夕へとうなるうの毛の春と下乃ゆゝ
左歌集よしたのゝ沼初の新なるう毛乃春

よしたゝの水よりへんたやをくきこえかうる指

十八番　左　指　　校大納言之經

友初ゝる春庭のゝ花おやゝくよゆ届くをゝやいゝ春
右　　前大納言資任
さゝゝ春池のゆをぬゝ氏もしゆゝ春のさけき清鶯
左上句不優右下句平懐や指芳非変歟

十九番　左　　右大臣
山川の秋のこゝゝうゝ斗よをゝゝ川流の紅葉のこゝ是羽
右　指　　前内大臣

夕川やうりて流いそぎあの目にわらわきされ舟の宮けさ
左不度歌不あり左奇のさ後をしらぬ心勝ゆうや

二十番　左　関白

芦垣や霜折さゆくかりしれは風をきそねのあるの夕
右　持　権大納言勝光

蓮野はさ羽の夕々山川の音ふきそれくつるにもみちぬ
芦垣やとをしらかなりやう今をく変思なきれ
作り水二句霜折さゆくつ林のゆて作り
風を為〇又北為をとく初ものを羽あまりた
風信を凝さんこのこと奇のをく優ふを

ここをえしかるら左よ保をり作へし

二十一番　左　持　松雪深　式部卿親王

下折の枝を所に行かれて雪のまの枝
右　右近大将義政

下折れ雪に為る雪や為つ人又言ゆ雪の折り松風
左下句いさらくをけ雪を屋ゆ作れとおりくて
右初さをあれ初ゆ初りれも六百番ゆ
合よ響林をて三をよゆ枝を作りゆ門林をを
ゆい枝いりゆ作ゆをたよ方人判者ゆよ
雖左次為方れ雪の下折いつまあさをを作次

松をまつかぜ

二十二番　左　勝　前大僧正満意

松をまつのさむきあらしのうちはらふ白雪

右　権大納言親道

奥つ浪ふきしをりよりたちそふるつむもとをる

左歳寒貞松しらゆきをしのぎてとをる

下句たをりくるかぜのたかくしらしく

こゝろはなれぬるは不思議なるやうは見侍るべ

二十三番　左　勝　関白

吹しをる風いとをもきゆきをおもみ

右　前大納言資任

今朝の松雪をはらはぬ言葉なれ

左奇風をもをれぬ松をみるに成

関白や右奇を雖不思議也松優

ゆきをはらはすとはきこえず勝

二十四番　左　勝　権大納言公雅

うゑをる松小をとをきこゑるや風よりはなれぬ言の下折

右　右兵衛督為冨

はるかぜ松の風と今いとやゆるとは吹ぬ

吹ぬ

左右又等同うして左勝劫

二十五番

左　雅康朝臣

吉野山梢をこえて吹ちらす嵐にそよ折る木の枝

右　勝　權大納言勝光

咲つゝて嵐にそよる立列いろこの心乃枝をつゝむ春

両首哥枝の嵐吉野山梢を吹風折をこそ

なり給ひいとやさしくめつらしくときこえ侍のみ

枝とゝまるもいとうつくしうよみ給ひいかゝ

心の吉野山をいさゝかたくとおもひ給

二十六番

左　勝

限りあれば枝ゝを業とゝまりつゝ独こゝろ乃色を

右　檢校僧都忠雅

今朝ゝ見し末の枝心ゝ乃春はやゝ白の白波

たちうつゝちらく咲らん吉野山こゝ乃枝ゝ乃よ心ゝ

とゝわたゝ乃をゝ忘つゝし花乃巻よ枝乃末のゝ乃花ゝ

うつゝてゝとゝこゝ乃ゝ吉なゝあるゝとゝ乃ゝ心ゝ乃ゝ枝ゝ

し末の枝心ゝ乃ゝ心ゝ乃ゝ人ゝかゝとゝこゝ乃ゝ乃ゝて太ゝ乃ゝ風乃

ゝ乃ゝ

二十七番

左　勝

右　宰相中將實雅

右　　前内大臣

うちなびくはるのみどりのいろふかき松をまつにいとはるばる
たちかはるのまがの雪をとりかさねてこそ
初春の文字に見なれていつくしきを雖もやはらかに
えらばれてこそいはるらんふるきをあらためて行るやさをわり
めしてたかきをとりてくみて行はいはゐ持

二十八番

左　　入道前内大臣

雪にあらそふ松をいけの底にうつして松の色をのこす
右　　前大僧正義運

けふをいくとせをかきこそ雪はらはまつを見ぬ行わらはる
たかき池のかたちに松をうゑ雪をはらはせ給ふ事の
ありがたき歟よりはるかに行末をかけて太高松を見ぬ
行はるかに優美也雪をはらはせ給ふ事

二十九番

左　　藤中納言雅親

うちなびくとは松の葉のまつ
右　　准后

白雪のつもるゆゑにやそこなはんと松の
たれの葉をたちうせをとりてこれをとりて
よりかけをみえ侍ると優にを侍を太高の

[illegible]

しくしてもて右の勝[illegible]

三十番

左 持　女房

あるしらぬ人の家に一村やむもれ雪の梢かなしん

太　沙弥浄空

[illegible]

左白雪一村右蒼海千尋秋芸耳心勝劣不分明

三十一番　恋久恋

左 持　右大臣

人[illegible]

右

我身さえ[illegible]月見[illegible]

右下句[illegible]

左年序[illegible]

[illegible]

三十二番

左　雅康卿

いくとせ[illegible]川の[illegible]立枝の上の雪面欲のこし[illegible]

右 勝　准后

[illegible]

[illegible]

を花井つとよめるを萩の下葉紅葉のようけたちに
葉ばりの面白くしかるべきことなりとうるるべしいへるもや
この枝の下葉いろ〳〵なるんとをかしくを見てをの陰か
こがるんを右わるるれ色よ秋好中宮わさしかる
しをとまにつるふまいてもわりやく春絵合の巻わ
いたさしく来よりる来るやたい不審のこまとり以
右為指

三十三番

左 持

左寄相撲師實雅

右 右

相撲人納之親通

いつまてうさのこと思ふのとり衣思のあまの衣うきこ年浪のかけてふとい
思ふのとり衣思のあまの衣うしてかるし作り舟
舟を同う彩へし

三十四番

左 持

式部卿親王

右

いくとう我方を秋の為ことに思ひいさわん
池泉浄室

毛月代思ふれ行くよかるとけの上しるるる秋の心
左身をあきこれ為よ神のかうこ流まうへくこうを
をくるる同ものくこ色志のふのかくるまかるとけ
為ひ秋をとこうこと作るけ作るまてうくいくこさ

まてくらこゑたに頼ありんとよしとたいつよりくんなる哉

おり〳〵るりや持労さらにめるらし

三十五番

左　　　関白

うち寄する波の海のよそにむすほれて袖とはるゝに

右 持　　右兵衛督為富

うき月日さらよかきるはいつかれん袖のかはくにみてぬ波も

左おりつるなみてこそなけるものした句みなりけりて

恋のおもひてみて侍る右さしもいへるしも共に

の論すへき侍れとも心のなかりけるにつきて可勝や

三十六番

左 持　　女房

あはきなく流れりの思ひをとうり蜉蝣の世いつまてと頼まれぬらん

右　　前大僧正義蓮

今さらにあふ人なをとりいつまてと思ふ心は絶え思ひはよらし

左はうり物思ひをとうり蜉蝣の世をいつまてかと宜しき

右も難なく聞ゆれとも左為勝

三十七番

左　　左衛門督雅親

いとしくわれせまき人を波のかさしもへめとわりもなき袖

右 持　　右近大将義政

逢ことはかなりしれを年月をたへてあはぬ身なるそ悲しき

たゝのおりむるをいうして むさしき心をもつて世をすぐ
をかをとにうつくしきこゝろ太平あふ年いかこうりをつ
まとしたゝ作のい道年を作るこさりし年をやをのこ
ををかをしたゝ作るこさりし嫁娘なるあるも作るるかをかを

三十八番

た　　柿大納言公經

作るみをいく年過を思ひ川あるれくの世はなきえいたりよ

右　勝　　柿の僧都忠雅

おりとしてをき閑のをうのいるくよりもれる波をうしまれ

た下白あれを宜し右菊はをあるふをとにをいる

ををををれるをや雑あるくをるを可為歟

三十九番

た　勝　　前大僧正滿意

をををををこゝろ心を月日のをうりけてあるトのをりいを

右　　柿大納言勝光

をけあをき心のれををまををてをををを月ををいをあん

右奇心はれるあるを作るつけていをふをいをまりくを

但作者をはくををいをりををあをふをををく

作るはををを心よりくををりをるをををしたつねあを

をを十番

た　　入道前内大臣

年ふれハ我の恵ふのかけまてやつ三草ハ名をもつまなき

右　勝　　前内大臣

末代つむ思ひをとくる世中にたゝしくまつふれ様あくもゝる

たゝしきふ以新瑞の恵みハ末けさをまさかめへき

是にそかつ為まてとりへるいさしつ勢かけらちあし

右年代つむ恵のふのまあへてつなれハ為勝

廿一番

左　勝　　祝言　　女房

むへしこそ我世よるひ芦原やあさ津の国の民のにきはひ

右　　右衛門督為富

今我も我神代をあふかし日のめえさして曇らぬためしとは

左非凡俗之所及尤可為勝

廿二番

左　持　　前大僧正満意

大内やふしくるにいのりてふ法の上りしハ君かよろつ代

右　　沙弥浄空

君かあかる事のこいのまうハ起てとも世に気をそへて待

左二句衣て居ましくきこえて万代の寶筭そいのる

法のまつりことその上も右文字の心衣にも世まてと

君代思ひしそてもいまての心を祝しく詞ハ思ひく

なら持勝をもれまへるへし

廿三番

左 持

芦屋やうちの人の家まもりて我世とたのむ

式部卿親王

右

たのもしくこたいはいまさて芦屋やうちの代のかしこさ

権大納言勝光

左右のあり京あり[illegible]代の方

四方持

四十四番

左

春の代の人のかふとみるたとへとく元方代のあるなるへや

右 勝

右大臣

神代よりの三種のぬりつくりてまとうけつく元方のこと

右近大将義政

左歌尚書伝範篇洛書華元治世之法隆相

叶祝言太哥三種神器我朝之雙之霊宝也

勝

四十五番

左 持

関白

代をおさめあるをあはせるやうや元方道の名を笑ふなり

准后

右

うきものさ大和流のものかもとかれ物をかの方の流れ

左右同科よ作へし

四十六番

左 勝

左宰相中将実雅

作へて行る方のこと元方代を久しかれとて神とまもる

右

右大将兼資任

天くのぬつきこゝろいなうさ海はまの数をよそへつゝ
古今 天ゝ代てかさりとわしなうさ海のまさこの数
よみけくとゝこゝ(る)ゝ
まとはかりとたゝくや古今さゝ世ゝ事しはゝ称し 勝俣

第十七番

左 持

(道)前内大臣

露無て数ゝさりはゝるよはゝいて秋ゝ代はゝたゝん

右

持大納言親通

天地のもゝくゝしきこゝろゝ我大ゝ君御代の為のし
数かさりあゝとゝ露無をゝとゝせ後いとゝなく

第十八番

左

第一 僧雅親

右 持

梯ゝやゝとゝわゝはゝつゝなゝわゝたゝさゝまゝゝ代ゝよゝかゝ(る)時ゝを

持 僧都右雅

我天のゝはゝいゝとゝいゝまゝ和ゝ歌ゝの浦や波のまゝ砂ゝと松のゝ数と
右天はゝよゝいゝよゝわゝのゝはゝうゝはゝまゝさゝゝゝ(る)ゝゝ
くゝこゝ紅ゝゝわゝつゝさゝりゝやゝうゝとゝわゝ波ゝゝいゝやゝしゝき
はなゝわ右ゝ歌ゝ持

第十九番

左　　権大納言公継

岩かきて　ちはやふるかみのみよりきたれるを　たれをかたて　教うふ　玉葉の歌

右　勝　　前内大臣

ねてもなほ　ちはやふるかみのみよりきたれるを　何なるたれを　幾代てきん

たされ　右の岩かきつたを　幾代　ねてもなほ　玉きたれうらなり

園女　為よ　ゆれい　勝　きうや

五十番

左　　雅康朝臣

若みなとの　こうきた竹の　いく代を限　まつ教　てこそ仰

右　持　　前大僧正義運

月日さへ　ちはやふるかみの　世　幾代　いくめぐりとも

左　竹　つ　きこう　を　右　月日さへ　ちはやふる　昭

をあ　ひ　ひ　ま　絶　の　ま　ま　ま　く　仰　可

右　持

左方

女房　　腊二持一員一

関白　　員二持二

〈道前大臣　　腊一持二員一

左兵衛督雅親　　員五

左近将中将雅康　　腊一員四

右方

准后　　腊二持二員一

右大将義政　　腊四持一

将大納言親道　　員二持二

沙弥浄空　　腊二持二

式部卿親王　　腊二持二

右大臣　　腊二員三

左宰相中将実雅　　腊一持三員二

将中納言公継　　腊一持二員二

前大僧正満意　　腊二持二

前内大臣　　腊二持一員一

前大納言資任　　持二員二

権大納言腊光　　腊二持一員二

右兵衛督為冨　　腊二持一員二

前大僧正義運　　腊二持二員一

権少僧都忠雅　　腊三員二

禁裏御會歌合　文明九年五月九日當座
花乃井大納言入道判同点

一番　春

左勝　御製

あかなくに花世をさそふなれやくれ行乃
春ふかくうくゑむ秀のゆく

右　邪高

花ゆゑにむかふ心乃あけぼのゝ
をしもわすれぬ春ゝ雲

二番

左　梶井法親王

なつ山ぶしもうやうやおもしろう乃見
ぬしのこゝろ知りがたなけれは
右勝　白菊内侍
ふるさと花ゆゑ思ひ出ぬ人なしは
ぶりやつとうんこれ乃しるし
二番
左持　滋野井前宰相中将
わけ入く花ゝ乃ことのはよりはやう
雲ゝのゆくへ乃みぬ人いとはしら
右　實隆朝臣

小ぶ城屋くうしたいさうぶ知さうあ
ゝこにゝ城ぶくうもるなわきれ
四番　夏
左　御制歌
さのこゝろ明来ぶ初ぶ知ぶ
こゝ乃ぶ後ぶ
右勝　梶井法親王
ゆふいわれ乃古ぶ
しゝてやみぬのいかうふうん
五番

左 持　　邦高

なみて流れる雲のまよりてよせくるあこの
白菊をうらぶれぬるあしの邪

右　　滋野井前宰相中将

ふれさへて淋しきりもしきわさなる
月はうしなれの世のこゑ

六番

左 勝　　勾当内侍

なへてうきを人をきつゝ小夜衣の身を
秋さえうらみきこゆるあしの

右　　實隆朝臣

名をもかくきてゆくゝ涼しきこゑのうへや
ふりなき年　かへまとうれふ

七番　秋

左 持　　御制衣

うすきもてみてみしの中てう
秋をもみちのいろ井わくら葉

右　　勾当内侍

山水ゆとくやこれのこゑ紅葉
いくしほうえんをうれをと

八番

左勝　邦高

あかしがたのうらにやどりをかたへよりそらまきれぬこのもの月

右　実隆卿

吹まきむ風にはあらぬこのうらに月も来れとくもりなしみめ

九番

左持　梶井法親王

ひくらしのうらのなみにあらはれぬ

右　滋野井前宰相中将

ひくらしのうらの秋をそ

さそひきはれぬるやあらしを

十番　冬

左勝　御制歌

ゆふ千鳥なくこえのみのこるかな

うらうちとけぬ夜の月かな

右　滋野井前宰相中将

あこやこの浦の夕の月かな

[illegible]

十一番　左　特　弁高

[illegible]

右　勾当内侍

[illegible]

十二番　左　勝　梶井法親王

[illegible]

右　実隆朝臣

[illegible]

十三番　左　持　御制歌

[illegible]

右　実隆朝臣

うれしきのみなかはまさりてめくりくる年
ありくれ行てむすひよるらむ

十四番

左 勝　　邦高

はらしとも花にかへて年ふれぬ
こゝろ強さかりてなけきおもひを

右　　梶井法親王

あはれてふ世のうきには思ふより
その風にあるはなけかる人ゆゑ

十五番

左 勝　　勾当内侍

身のうきを思ひしつめてこゝろをなほ
さらにとまするあらなりねなき

右　　滋野井前宰相中将

せきとめぬなみたの玉の緒よりみ
何のこそ人思ひきえしなて

勝負之外僻案愚考七首

栄雅上

御制歌

邦高　勝三　持一負一　点三

梶井法親王　勝二持二負一　点

勾當内侍　勝二持一負二

滋野井前宰相中将　勝三持一負一　点三

實隆朝臣　持二負三

文明哥合

一番　寒夜月　大納言殿

危　勝

秋ふかき夜半の月の新さらし
花大納言為富

右

空の海ぬれぬ色なく出ぬれん
右方ハ空の海を詠むとも見へ侍れ
月殊勝のよし一同申之
左方ハ浪ともしらぬ
とゝ以ゐるいろ

人いかゝ侍らんと雅永侍りし
左方左方より一回よ慶英卿さう歌一篇
恋を又匂ひ庶母せり巻この番合の例として
同番なる歌を左に尤の指ひとしき事なり
侍りをもしれを奇れ花桜かをよりし早尤
の指と定り侍りなり

二番

尤持　梅察使親長

桜まりかけさ人霞歌を紅をくけ歌神宮月
右　前中納言雅康

いむなりとおもはぬ人をさむきよ月冷て涌やいをる
左方より歌を形雅を侍り左方より後
撰集よ月を春といふ歌をいふ本
哥はを歌形りしやる宜侍りの左尤さ
し歌を雅を侍り左尤宝月をたのく
多あぬ人さる神小侍れと月のあ会
まさををしまをしきたりふいを紅人
人の人あさ侍りと蓮式部をを紅侍り海
宮は歌形の月をみさ人をあ歌尤れ
月歌賞をる心をる人しいむをふと後撰

集の前源氏物語のやうなる本説のこと
たゞおもはるゝこれら文字に優なるにや
あはれとも見えずいひてまけ侍る人侍る
かとよりや

三番

左勝　前大納言為氏

うけまちの松の木のまを吹分て嵐よりもる冬の月かな

右　権大納言公清

なゝ柳のふきもとよ浮雲はらふ嵐ふく

左まさるよし右方申されしかば左方申よし申され侍

判

左右のよさありても小もうの色くらべるに

勝とい

四番

左勝　参議基綱

もとゆひの霜もとかさねる袖の枕にあてゝこゝろ月も宿し

右　大宰大弐為広

霜まよふ枕の嵐打はらひ何ぞ折ゝ風吹よりもる月

左よき珠歌なれどもよりまさり右方申よし

判よろしき事もなし

五番

左 侍従中納言實隆

雲のよそに月吹きかへすかぜのなかにしかぬるよるの

右 參議永継

夕ぐれのうすくもりなるあけぼのに月のかたぶくこゑぞ

たのもしき

六番

左 政國

庭の面に花白雪のふるかとみえて井の月やあはれなるらん

右 宗伊

山月はなかばかたぶくあけぼのに雲のはしにもとまる

なかぞらにかすみなびくあけぼのに月かたぶくこゑぞ

たのもしき

七番

左 政茂

おきあかしつるしらぎくの神のまへにやどる月さへそなれ

右 頼行

ありしはなかばかたぶくあけぼのに月かたぶくこゑぞ

大方にいふ題の心しらにいはい知く候り

取方にいふ前に三句源氏物語の詞なりしハ

候れと耳まうち候かも

大方前に三句耳よ其外よし雖然ハ

ゆくり附くといふ詞作者ハのなかんとおもむ

其まゝ付つゝ取りし大和物語よ家永大將哥

にのおかうの歌よまうて移へ尤かなへそ

海なきよりも碎く秋いて付けゆくり

となく物し付へ尤こゝあらう又もとちみふ此

老ハ後もいかさま御きゆくりなく

〽をりつまさくこ候やら〳〵のゆまてりし

この哥よつけおもね心らし候のは河く

絶く老の心をにも候ゑへし　に哥

題の其しくにいはしつて候りよしり

きりれ世を識てり同心し候かな

利

八番

に　村　　政行

家ゆの秋をさ涼しく庭の面秋萩本涼さその月

太　　貞頼

雲はらふよのあらしに光そへてさやけき月や秋のかゝみん

左はさゆる心もさゆしき重寛たた
よこ光て秋しれしやらやは清冷右
光秋重光のし室雅のさゆる秋をさ
ゆくとあるおもひにいつもやえ
秋右方合よ秋をねとかのみ月の光
かとかけゆくもれきらけは志るまじく
其れ御ては不雅やうかれて侍れ
志れとふつれを不慮来か侍へし

陪不論指芳

九番

左 勝　　政淑

名も秋はいかなる空にすむ月の影里をうけておもひよし

右　　元為

更にいふあきら光をとりわかて月の清る光よ

右よりこよる雅なきようしよ御り左方
よこことしれるちとなし
左は水なき光月のかれしれは侍へし
参句の一字作星涼く氷鋪といへ秋句
なとしれるハ八月十五夜賦にて侍るにや

但井二句以下秋哥ゆゑ侍り　もの仙花
さそふとやみそのゝうちをうれさせる五
文字ゆゑ下ゝよりいくさこゝろを侍り右の
ゝうゝを論ずるにあらざるゆゑ右の
ゆゑを示をれし文相とし

十番

左　信

白雲のかけ絶ゆるまとをくゝ霜に紅葉を花ぞ散ちふの月

右　玄祝

うちとけて秋はゆ月の紅葉をゝ分ゝけ紅葉のさむしろ

右方ゝ云さゝ世ゝ名残ゝく侍りを方ゝ
云霜むしをふ神のゝゝきうちとけて
秋はゆ月乃ゝけそむけきゝ以へる
哥侍り同紅葉しゝや

十一番

左　信　竹雪深　親長卿

清つゝ為ゝ市や為乃ゝ為ゝ宮紅葉の美行

右　元為

行ゝゝ清ゝく市のゝ為ゝ紅葉を成行ゝ竹乃下陰
右方ゝ紅葉ゝ成ゝる事なきゝゝゝ方ゝ云

ことわりなるなし
たゞ世に人をとかむるまれさへ入竹のく
れあへりなんおかし太あり(?)やとおほへ
くもてみれ出されたいの折の月みての
とかん竹の初しよ竹の下とふらん其を然
なりぬいの末の名東海道足柄なれ
ころやとし竹あるによりて名付ける所
なく竹のやらん作者定て覚悟あるへ
竹と云詞に付く一夜やしかるといへき
ぬしたけきこなしよ然る古人を侍るを

一 河を作へきるなるぬしの心きてよ足柄関
あとをいまみあふは作れおこ竹れ
下ちいゝよに出てもをしく作れは先た
の播とく

十二番

左

大納言殿

ぬりつゝ過つるの竹を折て雪わけて定の眠

右

宗伴

山中のこぬりし竹を折てしくかしたをしぬ結
右方申云茂尾和歌ふ縁し見申え

竹取物語

十三番

左 持　公卿

ゆゑ深くなりぬとおもふ生竹のさえてよ秋の香

右　頼行

松に松つまとる紅葉の美竹をけちめみせてとうもの

右方よりこゝろ生の竹よ言のをもしに

ふかくせんえ竹りたゝ源氏物語

心やすくゝ竹り右のあさうかれ色よ松と

竹とのけちめおりくゝとうの松に松つま

なにとよましらふ松にすゝしうしに竹を

松にかゝるかゝるに松にしおかせてを

さこゝに紅こゝいさゝ迷竹と力あれ

やう丹竹り左方さゝそうの年なまま

おなゝてゝや

十二番

左 持　政憲

美竹をちらの丹者に春代の光とたくつゝる言ふ

右　為冨

ゝむ人の代のうゝを言斬の竹の末のゝけきみゝ

太方ヲ云殊羽なく行り
方ヲ云優婆ヲ云不及羽

十五番

左 持　　實隆

時くれたきたるこそなきもの哉行の友を待者の下れ

右　　負頼

うつるい籬の竹ぬしのつゆ消もむしふる雨
なをあきらをきたる方ヲ云さま
神とゝり殊羽なれを

十六番

左 持　　政茂

うゆるゝ行の末葉やちらぬ中ゝ根ゝ行者のこるゝ物

右　　永徳

下ゝ行の雨さへ〳〵の音の目ゝあるゝ〳〵の哉行
なをヲ指羽なれ中ゝ心あるさ海ゝ行り

十七番

左 持　　基綱

永つゝ小川の水に行ゝく者のこゝ〳〵の哉行

右　　言俊

うゆるゝ行ゝ行ゝ行ゝ一村ゝ竹ゝ行ゝ者ゝ行の

[illegible]

十八番

[illegible]　　政岡

[illegible]　　雅康

十九番

[illegible]　　重信

[illegible]

なにはがたみなうの間ちわ吳竹の末ふしをよつとうの雪

九　　為廣卿

うのはなとなしみなぬ吳竹のそこやすよ雪の色

九月三宴の詩の中よりて九方よりさきの書ゆこの心作り侍りしやうこしたゆ

以前月三月九

次書

九　　政行

あしたゆ今ふ沙汰とよ吳竹乃ちとふ合のうの宿の月名

九　　宣就

つとし仕ふ沙汰とうの月とい書にみつ人き園の吳竹

右ゆこ三月九日の雅なりたあよこ

月雅

次一番　忠遠卿

次二番

九　　政茂

むかしのことはふりにし人の袖の色を思ふにもあけは匂ふ袖かな

右　勝　　為廣卿

いもせ川あさくあさくせせいつかれい河むかし淵いとくん

左方申云志のふといふ詞文あるかつ

右方申しこの哥申云ふるくみゆよし申

作り

左の衣ふりにし衣の色紙さへ人よひく候

ためし思ひ定め心よかる人のたち那の作紙

しや紅葉の色く口わしくて作りたれ右

一の勝とて申し作りぬ

第三番

左　持　　政行

あふ坂の関路の行末よおもしろき思ひよ越れ

右　　雅康卿

又くらはあけぬ世の中ふりにし人めしく契いつ代のしるし

左方申云持雑なし右方申云無て難申之旨

第四番

左　持　　重信

よもすからあはれ梅とあふさかの山の花なりけり

右　　為富卿

[illegible]

右[illegible]

[illegible]

[illegible]

五番

[illegible]　基綱

[illegible]

[illegible]　元春

[illegible]

[illegible]

六番

[illegible]　政國

[illegible]　頼行

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

頂紙奥

廿七番

左 持　親長卿

まりはしをもとめやうこそなけれ　永徳

右

こまもしらぬ人をもこそはりはしの　実兼

たゆまぬ道をたのみぬるかな

ふるくやうなる作り

たうふの賀はまたもかうやはあれ

一書点なるの部もまいらせしかや

一作ゆかしき右一首のふるまひにつかはる

廿八番

左 持　實隆

あらしをもやはらぐるかぜのふきをはらはぬ　玄就

右

人をもしるしるべとやとはるるかぜのなかれ

たゆまぬ道をたのみぬるかな

はるをしるるるるなかれ

いたるやうなる作り

廿九番

九指　大納言殿

遊みなくて心の無なるまゝにあるあるまゝに山の麓の下に

右　言語道

もりてとゝまりたるものなるをとゝ人をよいてつけの義

たるまゝにて下句優美其指のはゝ作り九

方よりも世可雅とよ年

人のおくのまゝにふつけてとゝまるふの色

麓のまゝにたゝけまゝうふん濃れたるまゝく

とゝ結ぶれ右奇なるかりゝ紫はまく

いとつゝれるおもしろさを海に作れとを

可番　一　九よい雅及

九　公卿

とゝまるまゝ中なるまゝの道てふよりを探るき

右　指　家作

海の人神社あるまゝ所なるまゝ所とをてまくあるよい所

右方よりを雅なくく作りはゝに作りをく

いけるけら作く宜作り

九奇九海あるまゝ作りを下句よりてふ

人るまゝはいたにやきこゝを作りをを道

よせとゝとゝいひたくはしうをたく
はなまんといへる哥はつゝまく
なをゝもの〻ゝはつゝまよいなをれをそるいと
よはしく作り

題

寒夜月　作者　竹右京　忠蓮忠

九

大納言殿　拾二　拾一
桜宗使親長　拾一　拾二

前大納言公躬　拾二　頁一
冬嶽基綱　拾一　拾二
侍従中納言貫隆　拾一　拾二
政國　拾二　頁一
政茂　拾一　拾一頁一
政行　拾三
政遜　拾二　頁一
重信　拾二　拾一

十

前大納言為面　拾二　頁一

弟中納言雅康　指一　指二
指大納言言清　指二　頁一　頁二
右衛門督為廣　指一　指一頁一
冬嗣永継　指三
宗行　指一　指二　指二
頼行　指二　頁一　頁一
貞頼　指一　指二　指二
元為　指一　頁二　頁二
玄鼎　指一　頁二
讀師

講師
判者　衆議
入道大納言業雅
後日書判初
文明十三季十一月廿日

詞合

一番　原上霞

左　持　女房

[illegible]

右　式部卿宮

あさぼらけ[illegible]

松の葉[illegible]

二番

左　持　前大納言持季

[illegible]

右

[illegible]

中納言冬房

三番

左 持

[illegible]

前中納言長賢

右

[illegible]

中納言顕言

[illegible]

二番

左 勝

[illegible]

按察使親長

右

[illegible]

中納言信定

五番

左 持

[illegible]

参議二位

右

[illegible]

[illegible]中将教国朝臣

みしまの森の春風にさそはれて花の梢をわけそめ
春のこころにうゑそめしみしまの又さかりなる花の末
六番
左　持
けさ見れはみしまの春の風にこそ花のこころはうつりぬ
右　　左近将監中将實連朝臣
やくもたつ三島の野の煙はてゝ武蔵野の原
むさし野のゆきはあらはれぬ三島の原にはるはきにけり
七番
左
右　清原宿禰實右
こゝろいそかぬ春はなかめ
右　勝
伊豆守泰仲
はるかすみたちやくもの煙はてゝ武蔵野の原にはるはきにけり
八番
左　持
くりかへしかすみのうへにたちそめて柳の糸にはるはきにけり
右
はるかすみたちやくもの煙はてゝ武蔵野の原にはるはきにけり
後三位永親
中務卿兼橘以量
はるかすみたちやくもの煙はてゝ武蔵野の原にはるはきにけり

九番　春曉花

左　持

式部卿宮

さくらはなあかつきの曉のくもゐかすみそうとそはなさくらはなあかつきの

右

季春卿

十番

左

女房

風まちてちるこそはかなけれはなはなをしのはるはるのくれのこころ

右一勝

實連朝臣

月のこゝろのこゝろをいけやうてはなかわるゝはるの横雲

こゝろもあらしやはなはつきのこゝろのはなのあはれをしる

十一番

左　持

長賢卿

ちるはいとゝ雲のはるかすみのはるはなをしるこゝろ

右

教國朝臣

月のはるはなをみてとおもふかすみのそらはるのこゝろ

十二番

左　勝

持季卿

面影の色をそへてきよからぬ雨かとむしるかの下露

左　　孫言卿

なぬかりにうつきき花のうえの月を木ぬまにうつす雨はの

あるかなきの木のまの月を新てしらやこまの花の下露

十三番

を　持　　親長卿

あくかるる春のうつりかをあきをしくおもふむしのあとの花

右　　二位卿

いまさらの花さそいまつ消ぬる雨の月まち出て花をみるかな

わりなしや月まちぬかの花のをよあくかるる雨の音の花

十四番

左　持　　冬房卿

あまかるる木のまの月をかのくと花をうつしてえるかな

右　　永親卿

ぬるこうにと花をよとやる雨はの月いかとまの木のまの月

月新いかとをかはまたるくるかなる花をうつれ

十五番

左　持　　泰仲

あるに新をまてぬるて花をまちいつ新る雨の月

右　　構以量

高砂月にけてを山の陽ふるの花れたて雲
春とをを丹いとそそを高咲花の雲に花いつるの月
十六番
左　持
暁をな紙本のかをそらさて左ふ人やをかるをまん
右　実右卿
をいまををれをみをを吹風にあつを涼き花の雲にの
みををの暁やを紙花のををに花ふ心れををあを
十七番　寂光郭
左　持季卿
かををきを月まを月をを白を昌蔵の花ふ
右　実右卿
祝ふ月や契の郭を郭を月を月を月を
郭をを月あやめ杭をを月の新やをは
十八番
左　勝
ををつをきを花ふを河を寂光をの初を
右　教国卿
あやををきををを寂光の宮に花る一刻
あやををを花る寂光いをを花を

十九番

左 羽　　女房

なくなくかへるあけぬれば　ねぬ夜をかこつ

右　　親長卿

さてあるべきこころもとなく　あるにあはぬ夜をたのみとる

おもかげのまことにたのみなきかなしさ

二十番

左 勝　　長賢卿

一夜をさいりきはまりなきなり

右　　構以量

よるはまたしらぬ夢路にまどふ　ねぬ夜の床にまつをさそふ

とはれぬるきぬの袖をのこりなく　ぬれてやすらふ夜のあけぬる

二十一番

左 勝　　綱光卿

おもかげをかたみにあらぬ　ねぬ夢をかたらぬ袖に思ひ

右　　泰仲

さてもあはれなかたみの花のうへ　ぬれてなんとは袖に

さてあはれをとはぬかたみの　ぬれてやさらぬ

二十二番

左 勝　　秋言卿

一夜人みな月をてらす郭公なにをかたてとうらん

右　永範朝臣

かきもとの秋の月をもあはれとおもふ人にはいかにかはらん

二十三番

左　冬房卿

かれをつまかるかり秋の源宋成家かくらぬ心はくさしく

右　持　實連朝臣

都にはあれて荒のあやかさ人おもふ秋はいかにとはやとや

たちふりうるる寝覚の秋なれはあそもはのあらぬ物をえと

二十四番

左　持　公澄卿

月ゆかはかりの秋をふるさとの人はいかにとはるる郭公

右　季春朝臣

寝覚のとこをいとはいかに郭公ものうきはるの春の夜

二十五番　公雅卿

左　長賢朝臣

なにはてうらにはいかにかはるなれは世をはやまはつゆとは

右　持　源光卿

心とむるわかの浦なみさしてやまれぬ秋の夕暮
さそはしまこにとまる白いうきぬ秋とうつるみしの夕暮れ

二十六番

左　持

ちりぬくるやまぶきの花ちるとやあきの夕くれ

右　泰仲

うしろにせりてまつ人心ちるきりぎりす秋をとふ人とりか
人をうらみ心をかくるとてうらなして心もしきゆるとりなし

二十七番

を　持

式部丞宮

世ゆうれよりかぐらもむ月ぬさ[illegible]秋の夕暮

右　顕言卿

心あるこもむ月をしのの秋ちとふりとのにうきりの秋
世のうれよりかぐしの浦心をかつるもよのにねぐふ秋の夕

二十八番

を　持

女房

いわりさに炭乃葛葉ふ[illegible]あ[illegible]も神よもすがら秋乃夕暮

右　仁澄

山里ともみぢうれぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ秋の夕暮
あくれぬるまでなりかの[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ

二十九番

左 持　　冬房卿

[illegible]

右　　永親卿

[illegible]

三十番

左 持　　親忠卿

[illegible]

右　　季春卿

[illegible]

三十一番

を　　實右卿

[illegible]

右 勝　　実連朝臣

[illegible]

三十二番

を 持　　教國朝臣

[illegible]

右　構以量

心ゆけやとゝむとなうにてとうかまさる秋のうゝ雲

とゝみとゝまれるやまのいろとゝ[illegible]

三十三番　松間月

左　俗　　みを房つ

[illegible]

右　以澄つ

[illegible]

[illegible]

三十四番　と

左　持　　式部つ文

[illegible]

右　　祝長卿

[illegible]

三十五番

を　　女房

[illegible]

右　俗　　季春卿

松の葉のもとにかくれる神のうへの月や新つとも
もとむえぬもとの風やよるらん松のくもるに神の月新

三十六番

を　持

持季卿

秋さむき松のあらしもとくれて葉ごしの月の新てくるる

太　長賢卿

月ゆゑ松木のまよりあらはれの心はてにたにもれん
風の音はもとの松を中かけよ木のもとうすき月の新る

三十七番

た　教國卿

松風はもとの音にもかくれて木ぬけの月のもりこぬ

太　勝　恭仲

あき風のもとの松屋のもりきて木ぬけの月を新ぬる
ゆりにくる松の時雨はもとの木のもにあはれ新やはる

三十八番

た　持　經光卿

庭の面に松のもとにふりきてこのまたたる月の新

太　実連朝臣

風さりて松の葉こしの月もれ松ぬけ
時をもとの忍にて月をもれやはる松の葉こしたたる木ぬけも

三十九番

左 持　　弘言卿

つまもあきかぜにしやちるあきの月まつの木ぬれを出てゆくて

右　　橋以量

いくめぐりあきはすぎぬるあきの月かはるあきのひかりなれん

いりてそにやとるあきの月をまちてかりるあきの木ぬれを見

ゆ十番

左　　實右ゝ

かりそめにやどりの木のあきの月ほのぼのとぬれぬ

右　　永親ゝ

松をそなれぬ木のまにそそぐ出ぬるあきの八月の新月のかげ

山もあきの尾上にそそぐ月のあきの月をあきのなかるるかな

ゆ十一番　海邊書

左　　女房

ちぬみしむるあきはかぜにそよぐ吹ぬ

右　勝　　實右ゝ

ふかみしみにあきはなるかぜの海の松にかぜにそよぐ

ゆ十二番

左　持　　武部ゝ宮

[illegible]

右　　橋以量

さくらあさかすみ　ゆふ[illegible]　[illegible]

あさ[illegible]　[illegible]

四十三番

左　持季卿

[illegible]

右　泰仲

[illegible]

四十四番

左　女房

[illegible]

右　[illegible]

四十五番

左　冬房

[illegible]

右　[illegible]

雜波うちよせかぜさえくこほりかさなりて
三かの風のうちまつかのゆきけ山さとちりやまふきの白雪と

四十六番

左 持　　顯言卿

梢こしをよはかしたなるゆきゆしかぜつ原

右　　永範

ふりくるゆきはしたわきてゆく山と白雪ふかき浦なみ

浪あらし波のまくらゆく舟もうきてうつるゆきのうへ

四十七番

を 持　　經光卿

ふるゆきのうへにくる浪にうもれぬる舟の一むら

右　　教國朝臣

くもゐゆくとうつりはてゝとゝ和ゆきはやうへ山みくまのうら

一むらの舟とゝ和とまりに又とゝてうこの浦のくもゐゆく

四十八番

左 持　　公澄卿

うす雪のまつ枝の波はあさけ浦はまあまの小舟ゆくかあま

右　　實連朝臣

みさこうちまつ枝の波うす雪のうちにそふかさとさとうまの海

みさこうちまつ枝の波うす雪のうちにそふかさとさとうまの海

四十九番　恋　遠恋

左　持　　持季卿

年月経ぬるのふれるながめにもとふ歎きいかばかりにか

右　　永親卿

今宵さへ人なし社思ひ侘くるこの屋まとをとをしてあはれ下ル

あやめもしらぬやとりにこの有明にてむとしひとあはれ歎を

五十番

を　　女房

さしかをしこしぬふをたにしらぬ浪はあらしにふるとも此の間

右・勝　　式部卿宮

こしぬふをたにしらぬ浪はあらしにふるとも此の間

五十一番

左　持　　冬房

ちぎりし形の志のふれるなのなにか宮はむとふ海の契

右　　実方

ちぎりしかたの志のまもりをきつむとひ海は契を

こしに今恋ぬるなのつもりつむとふ契をもとをしき

五十二番

を　　長賢卿

あきらかなる夕やみのあさぼらけ
右 勝　　季吉
いにしへ人変りぬとやとゝめきれぬ
道のしるべ
五十三番
左 持　　孫三郎
もろこしもかけてめぐるとしつきを
右　　實連朝臣
まくらにしるるあきのうらかぜ
うしつゝ思ひ
花とよそにぞ
五十四番
を 勝　　親長卿
よそにのみ
右　　教國卿
なにとさしてくもゐの
とゝ
五十五番
左 勝　　公澄卿
おもかげ
右　　泰仲

こゝろをもてるかぜにあまをとこ[illegible]
あくがれてやすらひしたのもとに[illegible]

五十六番

左　持

今宵はこのもとにやすらひぬるかな　経光卿

右

恋衣さらでのみ思ひ[illegible]
ちぬ衣ぬるゝ袖とは[illegible]　橘以量

六十七番　蒲達路憲

左　勝

武部[illegible]宮

少[illegible]

右

[illegible]　持季卿

[illegible]

五十八番

左　持

[illegible]　親長卿

右

[illegible]　實連卿

[illegible]

五十九番

左 持　　女房

とくとくやこゝろの花よりくらべつゝ雲井にたてる

右　　冬房卿

わうらくにそなへてとゝのへよかしいろ花の雲井にうつさ

心あり雲井の花をこゝろにもいろ花つゝまるゝ方を

六十番

左 持　　長賢卿

めくりあひんこゝろ花のそうにたゝ苔かけし契のまゝにて

右　　実左

六十一番

左

あふさかのこゝろ隔るよるゝ雲のうゝ花の方や

右 勝　　経光卿

教図朝臣

雲かゝる仏をとゝまれ花をかけてゆるしたまへ海の波浪

雲かゝる仏をとゝまれ花をかけてゆるしたまへ海の波浪

六十二番

左 持　　永親卿

玉川さはたちわまちの月を契さしかくれぬとなかめつゝ

左　泰仲

そのむらさきの心をわけかねしいちいのもりの中をあくるあさ

玉章のうたをそなへつゝ契よりかゝる心をなにたのまん

六十三番

右　拾　顕言卿

そもむらさきのくゝりの心を清てそなへかゝるふちの心にうしを

左　橘以量

人をまつ心かよひのうこもの信つゝ中をさのこる宮ゐ

かしるのやそしに色つゝ清の心のゆゑ記しそにそねい

六十四番

を　拾　公澄卿

うしてそなへにるけきみちとうき中にはにゆゑて実の屋

左　季経

つまよりくるけき中にのりとき心し実の名さへうゝめ

恋衣うゝとさそしれりつゝ中にるけき中に関の清い

六十五番　猿宿夜面

を　長賢卿

秋すれそとさそしを思つゝ猿の面の家の面つま

左　拾　実連卿

こゝろふかくこゝろやたかきあさぢにすむ秋の夜のかすみ

ちよ松をよそやこゝろをこのふよの心しらぬ人のとゝろし

六十六番

を　右　式部卿宮

実方朝臣あふみ国にくだりしのち人のもとにつかはしける

太　実方

つゆけさをなにはてゝいかまくもゆふ床いまはしの野の村雨

ありしやわかれをふるさとの秋に床いまはしらるゝ秋の夜

六十七番

た　持季卿

さゝなみやわかの浦風ふきにけるなほよるなみの

太　持　教国朝臣

月ゆゑにうらぶれぬるかの松ばらにさよふけぬるかの

さゝなみやいさこの神をふるの里の月ゆゑにうらぶれぬる

六十八番

を　女房

宮ゐ人の松つゆをこそふるあまにかくしぬるかのやみの中に

太　持　公澄

この心のまことの法を尋ねてあまとなりぬる

をしなべてこゝろのやみの中にしてこゝろにやうの法のをを

六十九番

左　勝

冬房卿

草枕ゆめのあとを覚めてしく春さとあふよいに村雨

右

猿之丞

ゆめ覚めて猿のねの神とあめと波のそこくしるるし

なつてをの浦の波の面つねいなるそくしはふりまつて

七十番

左　勝

季吉

神なびわあをかに紅とふりとそゆくき猿のやとの村雨

右

永親

あをかにまきこ落てやもん猿衣よに紅雨しりあ(あ)まるよ

ふりとそぬらもとやとりに思ふ人来に紅雨と宿の名残し

七十一番

左　勝

親長

乃の屋のうねの床ひとに思ひきよいに村雨

右

張言

ときとぬ神しとかれくかりの内屋よすこき来に村雨

来とりに寄きてとふ紅雨に神やあるん

七十二番

左　勝

恭仲

なにはえうにたよりしたまふ事をうけたまはりて花の宴をうけ

太　　橘以量

年花のしらるるにあくるうの宴の名ぬさ初まれ村雨

夏ごろきまの花の面かくまるて小篠よ吉まさるこ

七十三番　　寄神祝

た　指　　女房

さかりしるあの花のかをうらやをるそまるの秋世

太　　持季卿

神風や伊勢をまのれ花の国をまりに民をいさ

ものいへとまに四や九をあの間かりてこそ神のうくみな

七十四番

を　脇　　冬房

春日ありたまの花をたのしてそ神をまたん

太　　教国朝臣

ちの神をうるかりをなる花代のつてこそ

立つへるたをうれしまを日心ありきみゆきの紅葉

七十五番

を　脇　　式部卿宮

ちは神にたてや紅をうたくちるむ不と秋を花

太　　実世朝臣

おきまし　ゆくすゑの　ゆかりとて　よ　八百よ　代を　君まもるら
　　ゆくすゑ　ながらへて　やちよの　かぎりを　世の　あるかぎりは

七十六番

左

親長卿

やしろの　ゆえ　ながらへて　ちよの　ちぎりを　君に　たのむる

右　持

公澄卿

あきの　ふる　みかの　川の　さかのぼる　世を　こえ　いのる　君

　　ふる　石の　ひと　ゆ　ひと　川　やすらぎ　ふんしゅ

七十七番

左　持

孫言卿

君　代　を　かぎり　ながら　ゆ　ゆ　ち　代　の　ち　の　ち　の　ち　の　ち

右

實右衛

世　の　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち

　　神　地　の　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち

七十八番

左　持

總光卿

神に　ま　ま　の　ち　ち　を　の　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち

右

橋以量

神　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち

　　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち

七十九番

左　持　　長賢卿

かゝる心さうゆゝしき代にあふぎよりほかにはなのけやちふん

右　　泰仲

末こそくれなゐなるもしかるべくこゝろさうゆゝしく宮と神のまにく

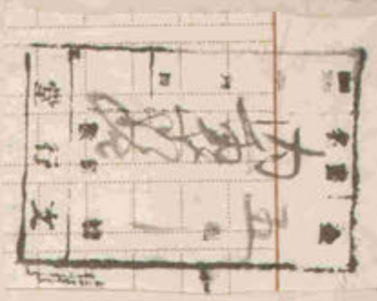
あしはらのひとつ流のあゝこゝろゆゝしき末の花とかゝしし

八十番

左　持　　季春卿

みそぎとはとゝのさまに仏世いとゝみやうとゝのこゝろに神よたいのう

右　　永親卿

さうに今のさまに仏代に仏右に神さう仏とたまもの

ひとの末に花のあるに神とまるのそこゝろにみたなを